

沖縄本島北部農村の「門中」とその論理：沖縄の民俗宗教ノート（3）

著者	伊藤 幹治
雑誌名	国立民族学博物館研究報告
巻	4
号	1
ページ	117-129
発行年	1979-07-30
URL	http://doi.org/10.15021/00004562

沖縄本島北部農村の「門中」とその論理

— 沖縄の民俗宗教ノート (3) —

伊 藤 幹 治*

Structure and Function of *Munchu*
—Notes on Folk Religion in Okinawa (3)—

Mikiharu ITOH

The patrilineal descent group is a basic unit of Okinawan folk society. This paper discusses the inter-directedness deeply rooted in the *munchu* descent group, of the northern part of mainland Okinawa.

- | | |
|--------------|-------------|
| 1. はじめに | 4. 折目と御願の諸相 |
| 2. 「門中」とその行事 | 5. むすびにかえて |
| 3. 男女神役とその役割 | |

1. はじめに

この報告は、沖縄本島北部の東海岸にある久志村汀間（ティーマ）の「門中」をめぐるモノグラフである。1960年5月現在、汀間は戸数75の農村で、集落は、村内（ムラウチ）とオンケーの二つに分かれている。そのうち、オンケーは、他村から移住した寄留民（チジューミン）の集落で、住民の大半が居住している村内が、汀間の中心になっている。

興味をひくのは、汀間に、つぎのような穀物起源説話が伝えられていることである。

沖縄本島が北山、中山、南山という三つの王国に分立していたころ、北山の武士が戦に破れて汀間にのがれてきた。そして、聖地ウヒー御嶽の洞穴にかくれて生

* 国立民族学博物館第3研究部

活していたが、ある日のこと、ヤス鳥とムム鳥という雌雄の鳥が飛んできて、その武士の頭上に稲種をおとしていった。彼は、その稲種をウヒー御嶽に蒔いたところ、三本の穂が出てきた。その場所はピルギ田と呼ばれ、汀間の水田は、このピルギ田からはじまった。その後、その落武者は、以前、汀間の集落があったカディカルに移住した。この家はカディカル大屋（ウプヤー）と呼ばれ、汀間在来の家々は、すべてカディカル大屋の分かれである。その武士は、しばらくして北山城にもどったが、城主の妹が南山の王にとついで折、その武士が汀間からもちかえった稲種をたずさえて、それを玉城村の「ウキンジュ・ハリンジュ」に蒔いたので、南山王国にも稲が栽培されるようになった。

沖縄本島が北山と中山、南山という三つの王国に分立していたのは、14世紀から15世紀にかけてのころといわれている。この説話は、こうした歴史を背景にしている伝承だが、興味深いと思われることがいくつかある。稲種が鳥によってもたらされたというモチーフが、そのひとつである。このモチーフは、沖縄本島の国頭や島尻の一部にも認められ、奄美の島々の一部にも分布している [伊藤 1974b: 227-228; 馬淵 1974: 613]。とくに興味をひくのは、汀間を稲の発祥の地と伝え、汀間で栽培された稲種が、南部の玉城村にある「ウキンジュ・ハリンジュ」に蒔かれたという点である。というのは、17世紀から18世紀にかけて成立した文献のなかに、「ウキンジュ・ハリンジュ」ではじめて稲の栽培がおこなわれたと記録されているからである。

たとえば、『中山世鑑』（1650）のなかには、沖縄の神話的原祖といわれる阿摩美久（アマミク）が、天にのぼって五穀の種をもらいうけ、麦と粟、豆、黍は久高島に、稲は知念村の大川と玉城村のヲケミゾ（ウキンジュ）に蒔かれたと伝えられている [伊波・東恩納・横山編 1962: 15]。また、伊波普猷が紹介した『聞得大君御殿並御規式次第』（1726）には、久高島に漂着した壺のなかに、稲種がなかったので、「アマミキョ」が天の神に祈って、「ニライ・カナイ」から稲種をとってくるように鷺に命じた、鷺は300日かかって、三つの穂の稲をくわえて帰ってきたので、これを「ウケ水・ハリ水」（ウキンジュ・ハリンジュ）に蒔いた、その場所は、三穂田（ミフダ）と呼ばれている、と伝えられている [伊波 1974: 255]。

汀間の穀物起源説話が、こうした伝承とまったく無関係に成立したとは考えられないが、汀間ではじめて稲の栽培がおこなわれ、琉球王朝と深いつながりのある「ウキンジュ・ハリンジュ」が生まれるまえに、ピルギ田が存在していたと伝えているのは注目に値する。

また、この穀物起源説話のなかには、いまひとつ注目すべきモチーフがある。それ

は、鳥がもたらした稲種をピルギ田に蒔いた北山の落武者が、カディカル大屋という家を創設し、その家が汀間の草分けの家になった、と伝えていることである。この説話のなかには、カディカル大屋創設の事情が語られていないけれども、このカディカル大屋のモチーフは、ピルギ田のそれとならんで、汀間の「門中」の論理を析出するうえで、重要な手がかりを提供している。

2. 「門中」とその行事

汀間には、根所（ニー・ルクル）と呼ばれる旧家が2軒ある。ひとつはカニク大屋（ウプヤー）、いまひとつは西大屋（イリ・ウプヤー）と呼ばれている。汀間在来の人びとは、それぞれの根所を宗家とし、その宗家を中心に父系出自原理によって編成された二つの「門中」に帰属している。

伝承によると、二つの「門中」の宗家に祀られている始祖は兄弟であったといわれ、二つの「門中」は古墓（アジ・ハカ）を共有し、その行事もまた、ほとんど一致している。1月3日の初御願、1月3日と9月15日の井戸拝み（カー・ウガミ）、3月の神清明祭（カミ・シーミー）、5月15日の5月拝み、9月18日の千手観音拝みのほか、「門中」の行事には、毎年、交替でおこなわれる3月御願と9月御願がある（いずれも旧暦による。以下同じ）。

初御願は初起こし（パツ・ウクシ）ともいわれ、カニク大屋を宗家とする「門中」（以下、「カニク門中」と呼ぶ）と西大屋を宗家とする「門中」（以下、「西門中」と呼ぶ）の共同慣行である。この日、二つの「門中」の成員のほかに、寄留民もまた、カニク大屋を訪れて、そこに祀られている先祖の位牌を拝む。また、2度にわたっておこなわれる井戸拝みの行事にも、二つの「門中」の成員のほかに、寄留民も参加している。人びとは、汀間にある古井戸を拝んでからカニク大屋を訪れ、再び、そのほかの古井戸の巡拝に出かける。この井戸拝みには、「ハーメー」と呼ばれる行事がともなっていて、子供に恵まれない人は、藁製の馬を棒のさきにとりつけ、その棒にまたがり、子供のいる人が、それをひく格好をして、カニク大屋から西大屋、御嶽の世持御宮（ユームチ・ウミヤ）を訪れて、子供がさずかるように祈願する。

神清明祭は、「カニク門中」と「西門中」に所属する人びとが、白餅と線香をもって古墓の巡拝をおこなう。古墓は、汀間のほかに、同じ久志村の安倍、大浦や金武村の松田にもあって、二つの「門中」の成員は3組に分かれて、ひとつの組は汀間の古墓、いまひとつの組は安倍の古墓、もうひとつの組は大浦と松田の古墓をお詣りする。

そして、カニク大屋から西大屋の順に宗家を訪れ、そこに祀られている先祖の位牌を拝む。この神清明祭がすむと、清明祭（シーミー）または流れ清明祭といって、人びとは、それぞれ自分の家の先祖の祭りをおこなう。5月拝みもまた、神清明祭と同じように、先祖祭りのひとつで、当日、「カニク門中」と「西門中」の成員は、それぞれの宗家を訪れて先祖の祭りを行っている。

汀間にいつごろ仏教信仰が普及したのかははっきりしないが、千手観音拝みが、二つの「門中」によっておこなわれている。毎年、9月18日になると、「カニク門中」と「西門中」に所属する人びとは、白餅と線香をたずさえて、それぞれの宗家に出かけ、そこに祀られている千手観音を拝むことになっている。ちなみに、千手観音は、2軒の宗家のほかに、「西門中」の4軒の家にも祀られている。

3月御願と9月御願は、隔年ごとに、日柄を選んでおこなわれるが、3月御願はカニク大屋を中心とする行事、9月御願は西大屋を中心とする行事である。いずれも、二つの「門中」から選出・継承された女性神役によっておこなわれている。3月御願のときは、女性神役は、「カニク門中」の宗家のカニク大屋が所有する三穂田（ミブーダ）と呼ばれる水田に出かけ、そこで祈願してから、カニク大屋を訪れて、神歌（ウムイ）を唱えて、その先祖を祀る。ちなみに、この三穂田は神聖視されていて、緑肥が用いられている。また、男女神役がおこなう5月御祭（稲の初穂儀礼）の際、世持御宮に供えるために、この三穂田から初穂が刈り取られる。他方、9月御願のときは、女性神役は、かつて汀間の集落のあったカディカルに出かけ、「西大屋」の宗家の西大屋が所有する勢頭畑（シドゥ・バタ）と呼ばれる畑で祈願してから、西大屋を訪れ、神歌（ウムイ）を唱えて、その先祖を祀る。ちなみに、勢頭畑とは、男性神役の勢頭神の畑ということで、この神役は、代々、西大屋から選出・継承されている。

以上が、汀間の二つの「門中」の行事のあらましであるが、注目したいことがいくつかある。二つの「門中」の出自関係を示唆する事実が認められることが、そのひとつである。すでに指摘したように、二つの「門中」の宗家に祀られている始祖は、それぞれ兄弟であったと伝えられているが、興味をひくのは、「カニク門中」の宗家であるカニク大屋に、汀間の原祖と考えられている北山の落武者の位牌が祀られているということである。このことは、カニク大屋と西大屋の始祖の系譜が、汀間の原祖の北山の落武者に収斂され、この原祖を祀るカニク大屋が、汀間の総宗家筋として位置づけられていることを物語っていよう。初御願や井戸拝みの際に、二つの「門中」の成員が、カニク大屋を訪れて先祖を祀ったり、また、神清明祭の折に、それぞれの「門中」の成員が、古墓のお詣りをすましてから、カニク大屋から西大屋の順に、2

軒の宗家を訪れて先祖祭りをしたりするのも、汀間の原祖を祀るカニク大屋が、二つの「門中」の総宗家筋とみなされているからであろう。なお、沖縄本島でひろくおこなわれている東廻り（アガリ・マーイ）の慣行も、汀間では、二つの「門中」の共同の行事になっている。

いまひとつは、二つの「門中」の行事のなかに、「門中」の成員のほかに、汀間に移住した人びとが参加している事例が認められることである。初御願や井戸拝みのときに、寄留民がカニク大屋を訪れて、そこに祀られている原祖をはじめとする一群の先祖を拝んだり、かつて汀間の人びとが用いたと伝えられる古井戸の巡拝をおこなっている。このことは、カニク大屋を中心とする二つの「門中」が、汀間という村落を統合するメディアとして、重要な意味をもっていることを物語っている。他方、寄留民も、二つの「門中」の成員と同じように、初御願や井戸拝みに参加することによって、汀間の住民としての一体感を再確認しているということができよう。

もうひとつは、「門中」行事のなかで、それぞれの「門中」から選出されたウクディが参与するものが、かなり特定化されていることである¹⁾。汀間では、初御願をはじめ、井戸拝み、神清明祭、5月拝み、千手観音拝み、3月御願、9月御願などの「門中」行事がおこなわれているが、ウクディが参加する行事は、そのうち、初御願と5月拝みだけにかぎられている。こうした行事の特定化が、どのような理由にもとづいているのかはあきらかでないが、ここでは、汀間の「門中」行事のひとつのあり方を示すものとして注目しておきたい。

3. 男女神役とその役割

一般に、沖縄本島の村落では、男女神役は一定の「門中」のなかから選出され、村の人びとを代表して、折目（ウイミ）と呼ばれる祭祀をおこなっている。汀間のばあいも例外ではない。1960年5月現在、「カニク門中」と「西門中」の成員は、汀間の総人口の半数にもみたく、村外から移住して定着した寄留民が過半数を占めているが、男女神役の選出・継承は、この二つの「門中」が母胎となっている。その意味で、汀

1) 1960年5月現在、ウクディは「カニク門中」からひとり選出されている。一般に、沖縄本島の村落では、ウクディは「門中神」（ムンチュウ・ガミ）とも呼ばれ、それぞれの「門中」の宗家または宗家から分立した家々から選出されているが、汀間では、選出の基準がきびしく、ウクディは宗家もしくは宗家に準じた家から選出されるものと考えられている。汀間のウクディの数がすくないのもそのため、「カニク門中」のウクディには、その宗家のカニク大屋の相続者の弟の娘が選ばれている。これは、カニク大屋の相続者が大阪に移住したためである。また、「西門中」にはウクディがいないため、「西門中」の宗家の西大屋出身の女性神役、根神が代行している。

間の祭団は、二つの「門中」が核になっているといっただろう。

汀間の男女神役を中心とする祭団は、沖縄本島南部西海岸の離島、慶良間群島の阿嘉島と慶留間島のばあいと同じように[伊藤 1977: 338-340]、祭団連合という形態をとっていて、同じ久志村の安倍と大浦、瀬嵩の祭団と連合して、ひとつの祭団を形成している。それぞれの祭団には、折目をおこなう男女神役が配置されているが、なかでも汀間は、神役の「ムトゥ」と呼ばれているように、祭団連合の中心になっていて、4カ字の女性神役を代表する祝女(ヌロー)も、代々、汀間の祭団のなかから継承されている。

汀間の女性神役は、「トゥヌ・ガミ」(殿神)とも呼ばれ、祝女と根神、若祝女、サグン神、ワキジキのほか、二人のヤジクからなる。7人で編成されていることもあって、女性神役は「ナナ・ヌ・カミー」(7人の神)とも総称されている。いずれも、「カニク門中」と「西門中」のなかから選出されていて、「カニク門中」から若祝女とサグン神が、「西門中」から祝女と根神などが選出されている。また、男性神役は根人(ニッチュ)と総称され、勢頭神(シドゥ・ガミ)や団扇神(ウチワ・ガミ)、太鼓神(テーク・ガミ)、サザクイ・ヌ・カミからなり、「カニク門中」からサザクイ・ヌ・カミが、「西門中」から、そのほかの男性神役が選出されている²⁾。

以上が、汀間の男女神役の編成と所属する「門中」のあらすじであるが、その継承過程に若干の変化が認められる。沖縄本島の他の村落と同じように、汀間でも、男女神役の中核の位置を占めている祝女や根神は、「門中」の宗家の血筋をひく女性によって継承されることを理念型としている。検証によって確認したかぎりでは、汀間の根神は、「西門中」の宗家に生まれた女性によって継承されているが、祝女の継承過程に変化が起きている。汀間では、祝女の継承は、かつて二つの「門中」の総宗家筋にあたるカニク大屋に生まれた女性のあいだでおこなわれていたが、カニク大屋が大阪に移住したことによって、祝女の継承の範囲が拡大され、カニク大屋の分家筋にあたる西大屋の宗家を中心とした「西門中」のなかから選出されるようになっている。

汀間の祝女は、こうして宗家の移住によって、先々代から「西門中」の女性によって継承されることになったが、これと似た事例は、ほかにもいくつかある。女性神役

2) 汀間以外の男女神役は、つぎのように編成されている。安倍では、根神の継承がたえているために、女性神役はワキジキ1人、男性神役は団扇神1人、大浦では、女性神役は根神とヤジク、男性神役は勢頭神とニープ神、瀬嵩では、女性神役には個別の呼称をもたない8人の「トゥヌ・ガミ」(殿神)と男性神役には勢頭神、団扇神、ニープ神がいる。字によって、男女神役の編成は一定していないが、あとで指摘するように、汀間の祝女が、これらの男女神役の中核になっている。ちなみに、この地方では、祝女は「シカ・ヌ・カミ」(4カ字の神)、根神は「アザ・ヌ・カミ」(字の神)と呼ばれている。

の若祝女とワキジキや、男性神役の勢頭神と団扇神、サザクイ・ヌ・カミが、それぞれ那覇市や沖縄市に転出して、汀間には居住していない。なかには、男性神役のニープ神のように、南米のペルーに移住して、すっかり継承がたえている神役もいる。沖縄本島内に転出した神役は、折目ごとに、汀間にもどって祈願に参加しているようだが、このことは、将来、汀間の男女神役の編成に変化をうながす起因のひとつともなる。

このほかに、男女神役の呼称が、それぞれの神役の役割と直接、関係していることも、この際、注目しておきたい。沖縄の島々では、男女神役のなかで、女性神役は主導的な位置を占めていて、男性神役はその補佐的な役割をはたしているにすぎない。汀間のばあいもまた、例外ではない。とくに汀間では、祝女と根神、若祝女の3人が、女性神役の中核的存在になっていて、どの折目にも参加している。そして、その報酬として、麦ジカ、稲ジカといって、毎年、麦の刈り上げ儀礼の4月御祭と稲の刈り上げ儀礼の6月御祭の際、男性神役のサザクイ・ヌ・カミが家々を訪れて、1戸あたり1合の麦と稲をあつめ、これを3人の女性神役に均等に配分することになっている。

興味をひくのは、そのほかの男女神役は、つぎのような補助的な役割しか与えられていないことである。たとえば、女性神役のサグン神は、6月御祭のとき、御嶽に供え物を持参する役、ワキジキは祝女や根神、若祝女のお伴をする役、男性神役の団扇神は、折目のときに、クバの葉を御嶽に供える役、太鼓神は太鼓をたたいて折目の開始をつける役、サザクイ・ヌ・カミは、すでに指摘したように、各戸から麦ジカや稲ジカをあつめたり、特定の折目や御願のときに、家々を訪れて供え物の材料をあつめたりする役で、4月御祭には麦3合、6月御祭には米3合あつめるほか、11月の甘藷の御願には、ひとりあたり甘藷1個あつめている。また、継承がたえたままになっている男性神役のニープ神は、折目のときに、女性神役に神酒をつぐことを主な役割としていた、ということである³⁾。

汀間の男女神役は、その役割という点からみると、祝女と根神、若祝女という3人の女性神役を中心に編成されていて、そのほかの男女神役は、その周辺に位置づけられている。しかし、どの神役にも、共通して課せられていることがひとつある。それは、「アラダム」と呼ばれる加入礼を経なければ、一人前の神役として認められない

3) 男女神役のほかに、汀間には、祝女の世話役として、サンナムモーと呼ばれる女性がひとり選ばれている。サンナムモーは汀間と安倍、大浦、瀬嵩の祭団連合によっておこなわれる折目の5月御祭や6月御祭、豊年感謝祭などのときに、祝女の祭具をもってお伴するという役目が課せられている。なお、サンナムモーは昔から汀間の女性のなかから選ばれていて、祝女と根神が、汀間の女性のなかから身持ちのよい人を選び、村の人びとの承認をえるという手続きをとっている。

ことである。この加入礼は、稲の初穂儀礼の5月御祭か稲の刈り上げ儀礼の6月御祭、8月10日の豊年感謝祭の折に、世持御宮のそばにある「アサギ」でおこなわれているが、5月と6月が稲の収穫期にあたるので、「アラダム」は8月10日の豊年感謝祭の折におこなわれることが多い。

4. 折目と御願の諸相

汀間には、世持御宮（ユームチ・ウミヤ）をはじめ、大嶽（ウプ・タキ）、ウヒー御嶽と呼ばれる聖地がある。折目（ウイミ）や御願（ウガン）は、すべてこれらの聖地でおこなわれているが、なかでも、世持御宮は汀間の聖地の中心になっていて、ほとんどの折目と御願は、この世持御宮でおこなわれている⁴⁾。

汀間では、麦の刈り上げ儀礼の4月御祭が折目のはじまりといわれ、4月御祭にひきつづいて、稲の初穂儀礼の5月御祭、稲の刈り上げ儀礼の6月御祭、子供の健康を祈願するワラビ折目、8月10日の農作物一般の豊年感謝祭、稲の播種儀礼の種取り（タントゥイ）などの折目がおこなわれている。これらの折目のうち、5月御祭と6月御祭、豊年感謝祭は大折目（ウプ・ウイミ）と呼ばれ、汀間と安倍、大浦、瀬高の合同の折目になっている。その当日、汀間の男女神役は、世持御宮で祭りをすますと、祝女が勢頭神や団扇神、太鼓神、サンナムモーをつれて、瀬高、大浦、安倍の順に3カ字を訪れ、それぞれの「アサギ」で祈願するというのが、この大折目の共通した様式になっている。

その意味で、大折目は祭団連合を反映した行事で、その規模も相対的に大きく、そのほかの折目は、すべて汀間だけで独立しておこなわれている。なお、大折目もそのほかの折目も、汀間での祭祀は共通していて、男女神役が世持御宮を参拝してから、そのそばにある「アサギ」にあつまって、共同祈願をおこなうという様式をとっている。しかし、男女神役の参与のあり方は、折目によってかならずしも一様ではない。5月御祭と6月御祭、ワラビ折目、豊年感謝祭には、すべての女性神役が参加しているのに対して、4月御祭と種取りには、女性神役のうち、祝女と根神、若祝女だけが参与している。

また、折目にもなう行事にも、いろいろな変差が認められる。5月御祭（5月25

4) 世持御宮が創設されたのはあたらしい。1956年ごろといわれている。この御嶽は、以前、小さな御嶽（ウタキ・グッ）と呼ばれていたが、祝女殿内と根神殿内に祀られていた神々を合祀し、また、その近くに、もと村内（ムラウチ）のはずれに設けられていた「アサギ」を移したということである。

日)には、ひとりの男性が選ばれて、汀間の原祖を祀るカニク大屋が所有する三穂田(ミプーダ)から、稲穂を3本とって、これを世持御宮に供えている。6月御祭と種取りは3日間にわたっておこなわれ、6月御祭の1日目(6月24日)には、7人の女性神役が「アサギ」で神歌(ウムイ)の練習をおこない、翌々日(6月26日)には、神歌を唱和してから、海願いともいって、世持御宮で豊年祈願もおこなわれる。種取りの1日目は御嶽御願(ウタキ・ウガン)と呼ばれ、祝女と根神、若祝女は、男性神役といっしょに世持御宮を訪れて種取りの祈願をおこない、3日目は種取り御願(タントゥイ・ウガン)と呼ばれ、神役たちは、女性神役のワキジギの実家を訪れて稲の豊作祈願をする。種取りとワキジギとの関係はあきらかでないが、かつては、この折目がすむまでは、人びとは種蒔きすることができなかったと伝えられている。ワラビ折目には、子供の健康祈願がおこなわれ、祈願がすむと、子供たちに神酒がすこしずつ与えられる。8月10日の豊年感謝祭は、天の神に豊作を感謝する折目といわれ、翌日、汀間の家々は、前組(または西組)と後組(または東組)に分かれ、綱引きがおこなわれる。前組は女綱、後組は男綱を用い、後組が勝つと来年は豊作、前組が勝つと来年は凶作になるといわれている。

汀間では、御願もまた、男女神役によっておこなわれている。大折目のように、汀間と安倍、大浦、瀬嵩の男女神役が合同しておこなう御願もある。1月3日におこなわれる初御願とか嶽御願と呼ばれる御願がそれで、この日、汀間の男女神役は瀬嵩の御嶽を訪れて、そこで他の字の神役と合流し、初祈願をおこなう。そのほかの御願は、すべて汀間でおこなわれているが、世持御宮でおこなわれる御願もあれば、世持御宮以外の場所でおこなわれる御願もある。また、男女神役が全員参加する御願もあれば、特定の女性神役によっておこなわれる御願もあって、その様式は一定していない。

1月3日には、「門中」の井戸拜みと並行して、男女神役によって正月井戸御願がおこなわれる。すべての男女神役は、世持御宮で祈願してから、汀間にある古井戸の巡拜をする。1月29日の火の御願(ピー・ヌ・ウガン)は、祝女と根神によって世持御宮でおこなわれ、3月3日の龍宮拜みには、祝女と根神が浜へ出かけ、東方にむかって、海の神に航海の安全を祈願する。11月には、日柄を選んで、祝女と根神、若祝女は、世持御宮で甘藷御願をおこない、家々からあつめられた甘藷を供える。12月8日の餅御願には、祝女と根神、若祝女が、世持御宮に鬼餅を供えて祈願する。また、いつごろはじまったのかあきらかでないが、キリシタン・チョウとかキリシタンと呼ばれる御願もおこなわれている。以前は、11月10日に実施されていたが、戦後になって新暦12月25日におこなわれるようになった。この御願は、九州北西部に分布してい

るいわゆる隠れキリシタンとは関係がない。ワラビ折目と同じように、一種の子供の健康祈願で、当日、祝女と根神、若祝女は、世持御宮で子供の健康を祈願をするわけだが、この1カ年に生まれた子供のいる家では、子供をつれて御願に参加し、世持御宮に子供の無事息災を祈願する⁵⁾。

汀間の御願は、折目と同じように、主として世持御宮でおこなわれているが、ウヒー御嶽や大嶽を祈願の対象とした御願もある。正月井戸御願や火の御願が世持御宮でおこなわれていることはすでに指摘しておいたが、この二つの御願は、ウヒー御嶽でもおこなわれている。また、9月9日には、祝女と根神、若祝女が、大嶽を訪れて、村の人びとの健康を祈願している。なお、この日は、ウヒー御嶽と大嶽の除草の日になっていて、各戸からひとり参加することが義務づけられている。

以上が、汀間の折目と御願の概要であるが、御願のなかに、「門中」行事と対応した慣行が認められるのが、まず興味をひく。「門中」行事の初御願と井戸拝みに対応した初御願（御嶽御願）と正月井戸御願というのがそれで、それぞれ1月3日に別々におこなわれているが、井戸拝みと正月井戸御願が、同じ古井戸を祈願の対象としているのは、おそらく汀間の原祖の出自をひくと認知され、しかも、村の人びとを代表して折目や御願をおこなう男女神役を生みだしている二つの「門中」が、汀間の祭祀=行事体系のなかで、重要な位置を占めているからであろう。

また、折目も御願も男女神役によっておこなわれ、両者の区別がはっきりしていないことも注目される。これと似た事例は、浜比嘉島にも見られるが [伊藤 1974a: 157-164]、なかには、古宇利島のように、御願と呼ばれる慣行を折目の一部に組み入れて、男女神役がおこなう村落レベルの祭祀を折目、男女神役が参与しない家族レベルの行事を節日（シチビ）と呼んでいるところもある [伊藤 1977: 793-800]。このように、折目と御願の関係は、ところによってかならずしも一様ではない。汀間のばあいは、しいていえば、御願にくらべて、折目のほうが規模が大きいということができるが、両者の関係は、沖縄本島における祭祀=行事体系にかかわる問題として、将来、改めて検討する必要がある。

5) いずれも定期的におこなわれる御願であるが、このほかに、つぎのような不定期的な御願もおこなわれている。「ヤー・ヌ・ウガン」と「ワシ・ヌ・ウガン」、「タティ・ウガン」、「フトッキ・ウガン」がそれで、どの御願も家族レベルの行事であって、御願を必要とする家が、祝女や根神、若祝女のうち、だれかひとりを選んでおこなう。「ヤー・ヌ・ウガン」は家屋の新築や改築のときおこなわれ、女性神役のひとりが、ススキの穂を手にもって、神歌（ウムイ）を唱えながら屋内をきよめる。終わると、米を屋敷の4隅にまく。「ワシ・ウガン」は1種の星占いで、庭先に米と酒を供えた膳を用意し、線香をたいて家族の運勢を占う。また、「タティ・ウガン」と「フトッキ・ウガン」は、家族のものが旅立ちするときと旅からもどったとき、世持御宮を訪れておこなわれる。

最後に、播種儀礼としての種取りが、1期作のころの播種の時期にあわせておこなわれ、播種儀礼の時期と実際の播種のそれとのあいだに、ずれが生じていることを指摘しておきたい。戦後、沖縄の水稲栽培は、収量の増加をはかって、1期作から2期作に転換した。汀間のばあいも、例外ではなかった。1期作のころは、播種は11月、田植は翌年の1月から2月、収穫は6月におこなわれていたが、2期作に転換すると、その1期が、播種1月、田植2月、収穫6月、その2期が、播種6月、田植7月、収穫11月におこなわれるようになり、播種の時期が大幅に変化するに至っている。こうした変化にもかかわらず、汀間の種取りは、1期作のころの時期にあわせておこなわれているわけで、このことは、折目の持続性もしくは安定性という問題を考えるうえで、注意すべき素材のひとつになるう。

5. むすびにかえて

以上、汀間の原祖をめぐる伝承を手がかりにして、「門中」行事や「門中」から選出された男女神役がとりおこなう折目や御願の問題を取りあげて、若干の検討を試みたわけだが、ここに二つの点を指摘して、むすびにかえたい。

ひとつは、汀間で稲の栽培をはじめ、この村落を創始したといわれる神話的原祖が、汀間の統合のシンボルとして、祭祀=行事体系のなかに意味をもちつづけていることである。カニク大屋と西大屋を宗家とした二つの「門中」が、その一部の行事に寄留民の参加を認めたり、また、村の人びとを代表して、折目や御願をおこなう男女神役を代々、選出・継承しているのも、二つの「門中」の宗家の始祖が、汀間の神話的原祖ともいうべきカディカル大屋の創設者と出自関係があると認知されているからであろうか。

この点と関連して、いまひとつは、汀間の「門中」のなかに、内部志向ともいうべき論理がたらぬれていることである。一般に、沖縄本島の農村では、「門中」とか「ハラ」と呼ばれる父系出自集団が、社会編成の重要な単位になっている。汀間のばあいもまた、例外ではない。

しかし、ひとくちに「門中」とか「ハラ」といっても、その論理はかならずしも一樣でない。沖縄本島の中部の浜比嘉島の「門中」や、南部の玉城村糸数の「ハラ」の一部には、集団としての権威の正統性を村落外に求めて、沖縄本島全体にひろいネット・ワークをもっている、より規模の大きな「門中」体制の傘下に組み込まれたり [伊藤 1974a: 164-173]、あるいは、沖縄の古典神話のなかに登場する原祖「アマミ

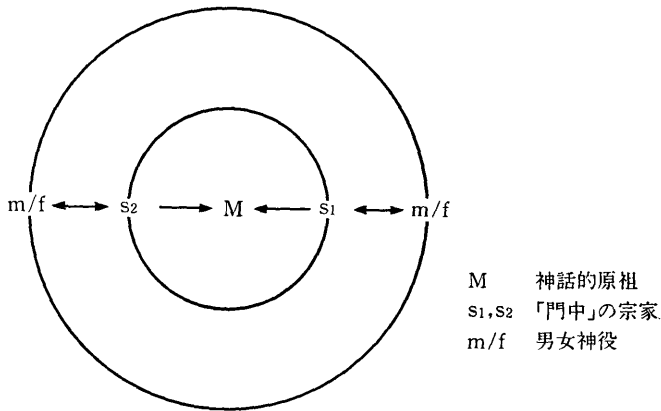


図 「門中」の内部志向のメカニズム

キョ」に出自の原点を求めたりしている [伊藤 1976: 186-188]。

いずれの事例も、「門中」や「ハラ」の権威の正統性を外に求めているという点で、外部志向の論理ということができるとすれば、汀間の「門中」は、それとは逆に、内部志向の論理によってつらぬかれているといつてよいだろう。汀間の神話的原祖をめぐる伝承が示唆しているように、二つの「門中」の宗家に祀られている始祖が、汀間創設の基礎をつくった神話的原祖に収斂されていて、汀間外の「門中」や古典神話に出現する原祖などは、ほとんど意味をもっていないからである。

興味をひくのは、二つの論理が、それぞれ地域を異にした村落に見られることである。外部志向は、沖縄本島の中部と南部の農村に、内部志向は、汀間のように、沖縄本島の北部の農村に認められる。このことは、二つの論理が、地域性とかかわっていることを示唆しているが、この点をあきらかにするためには、将来、事例研究を積みかさねていかなければなるまい。それにしても、外部志向が、かつて琉球王朝の中心であった首里に近く、王朝文化の影響を受けやすかった地域に見られるのに対して、内部志向が、首里から遠くはなれた地域に認められているというのは注意してみる必要がある。二つの論理が、首里文化の影響の濃淡と、まったく無関係だとは考えられないからである。

謝 辞

この報告は、1960年2月から5月にかけて、断続的におこなった調査によって採録した資料の一部にもとづいている。筆者をこころよく受け入れてくださった汀間の方々に厚くお礼申しあげる。

文 献

- 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編
1962 『琉球史料叢書』5 井上書房。
- 伊波普猷
1974 「南島の稲作行事について」『伊波普猷全集』5 平凡社, pp. 248-293。
- 伊藤幹治
1974a 「祭団の構造と論理——沖縄民俗社会論(1)——」『国学院大学日本文化研究所紀要』33: 155-182。
1974b 『稲作儀礼の研究』而立書房。
1976 「村落の論理」九学会連合沖縄調査委員会編『沖縄——自然・文化・社会——』弘文堂, pp. 181-189。
1977a 「慶良間群島の祭団連合——沖縄の民俗宗教ノート(1)——」『国立民族学博物館研究報告』2(2): 336-350。
1977b 「古宇利島の聖地と折目——沖縄の民俗宗教ノート(2)——」『国立民族学博物館研究報告』2(4): 790-805。
- 馬淵東一
1974 「沖縄の穀物起原説話」『馬淵東一著作集』2 社会思想社, pp. 603-624。